

1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県

おしきり〔旧押切村跡〕

押切村の起源は不詳です。一日市村誕生の寛文2年（1662）一日市村に吸収合併され押切り村は消滅しています。またここから北東800程のところ、一日市集落西端部に位置して織豊期の平城押切城があったといわれています。付近をもと押切村と呼んだ。

馬場目川の河跡湖を水堀に利用したと言い、西側に半円状の跡を残しています。

南北およそ900m・東西およそ400mの規模で、堀の幅は約40m。

平城なるが故に軍事的機能に乏しく、伝えによると、浦大町の浦城主三浦氏が、湊合戦の際秋田実季に反抗、その後その命令によってここに移転させられたといわれています。若干の土師・須恵片が出土しています。

馬場目川の右岸、そして羽州街道の西側に位置するから、ある程度水陸交通の便を加味して構築したものと思われています。今、周辺は広い田んぼとなっています。

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

押切〔オシキリ〕

関東・東北・中部地方だけの地名であるから飛鳥時代から奈良時代にかけてのものではなかろうか。大洪水のとき川の流が堤防や丘陵を押し切ったところで、曲流している川や支流との合流点付近によく見かける。

秋田地名研究会年報から

おつとど（おとど）おつとど【夫殿大権現・夫殿岩屋】

干拓前は湖のほとりにあった三倉鼻の西側崖下、国道7号に面したところに賽の祠があります。この洞窟は、この辺が昔海岸だった頃の波の侵蝕作用によってつくられた洞穴といわれています。

赤い鳥居の奥には、おつとど「夫殿大権現」が祀られて

います。ここには八郎湖伝説やいろいろな民話が伝わっています。

【民話】 永遠の棲所を求め米代川を下って天瀬川に着いた八郎太郎は、長者の家で一夜の宿を請いました。一夜の宿のお礼にと、八郎太郎は、親切にしてくれた長者夫婦に「明朝一番鶏が鳴くと同時に、ここは一大湖水になるので、はやく逃げてください」と長者夫婦達を助けてたちのきの準備をしていると「コケッコー」と一番鶏が鳴きだしました。

すると山がゆれ、大地がさけて水がどンドンわきはじめたので、川舟に乗って岸をはなれようとしたとき、忘れ物をした老婆が家に向けこみました。水は津波のようにおしよせ、どンドン深くなっていて老婆は舟に乗ることができずおぼれそうになりました。

これを見た八郎太郎は足先でぼんとけりました。老婆は空中高くまい上がって芦崎（現八竜町芦崎）まで飛んでいったということです。

飛んでいった先の芦崎には姥御前大明神があって老婆が祀られており、ここには夫殿大権現として老翁が祀られています。（琴丘町の民話から八郎湖伝説にかかわるお話です）。

鶏

昔は天瀬川では鶏をタブーとされており、飼ったり卵も食べない習慣がありました。鶏をなぜ食べなかったのか？ 八郎太郎は龍である。龍は龍神様である。龍の足は鶏の足と同形である。故に鶏は龍であり龍神様である。鶏を食することは、神である龍を食することになる。（秋田経法大学学長 井上隆明 八郎太郎の文学的構造より）また、雨乞いを祈る風俗習慣があり、旱天の夏、鶏の生血を岩屋の壁に塗りつけると覲面（てきめん）の効果があり、雷鳴と共に降雨をもたらしたといわれています。

姥御前神社

八竜町芦崎字芦崎308に鎮座しています。祭神